

博士の逝

深田康算

殆んど二十年の間東京帝國大學の哲學科に教鞭を取られ、其後引退して著述に従つてゐられたケール博士は其三十年に亙る日本に於ける生活を七十五歳を以て終はられた。五月の下旬に發病せられる迄執筆を續けられてゐたことは雜誌「思想」の讀者の知る所であらう。博士は六月十四日未明に十年以上住み馴れて居られた横濱露國總領事館の一室に於て逝去された。遺言に基き宗教上其他何等の式をも營むことなく東京雜司ヶ谷の墓地に埋葬せられた。博士を忍ぶよすがとして、左に久保勉君が親しく博士に聞きたゞされた所の小傳を同君の許をえて Deutsche Blätter から轉載する。

同誌には獨逸原文も添へられて居る。(康算)

小傳

ニシニイ・ノゴロッドに生れ、誕生の地がロシアに在ることは、必しも博士がロシア人であることを證するものではない。なせと云ふにその家はザクセンから出てゐる―その父方の祖先は皆ザクセン生れであつた。その血管を流れてゐるロシア人の血はたゞ僅に數滴に過ぎない、しかもそのロシア人の血といふのも瑞典人の血と混じて居つて母方から來たものである。ロシア政府に仕へて實際の帝國顧問官として死んだ先生の父君グスターフ・ウヰルムは博學な人であつた。ケール先生は一歳の子供の時に母君を亡くされたので、レービンダー家出の祖母君(母方の)に引取られてその世話になられた。この婦人については先生は何時も衷心の愛慕と深い尊敬とを以て語るを常としてゐる。

先生はロシアの學校を好まなかつた、それで通

學することも不規則であつた。先生はその「小品集」の中に書いてある、「私が無智のまゝに生長することなく、また後年相當の準備教育ある學生として大學に入るを得たのは、高雅な自由な精神と稀有の教養と心からの親切とを兼ね備へたる婦人であつた私の祖母の心遣と、私の父とオルデンブルヒ生れの私の叔父のクラウゼンと良き家庭教育師達とのお蔭である」と。先生に最初音楽を教へたのも亦祖母君であつた。自らフィールド（當時の著名なピアノリスト）の弟子であり且つ立派なピアノリストであつた彼女は、先生がやつと六歳になるかならぬ時、ピアノ演奏法の初步と樂譜の読み方などを教へ込んだのである。その後得た良い音楽教師は、先生の曾祖父君レービンダー氏の建立にかゝる、ニシニイ・ノゴロツドの新教々會におけるオルガン演奏者のパウロと云ふ人であつた。ギムナジウムを以

先生は、

成り父君の意志に反して、身を全く音楽に献げるためにモスコの高等音楽學校に入學した。此學校で師としたのは、ニコライ・ルービンシュタイン（アントンの弟）、チャイコフスキー、クリンドウオルト其他の人々であつた。千八百七十二年に先生は全科卒業證書を得て音楽學校を出た。然るにその生れながらの内氣が音楽者の生活に入ることを妨げた故に、先生は志望を轉じて學者の生涯に入らうと決心するに至つた。この意圖を抱いて先生はドイツに向つて旅立つた。先づ最初にはイエナ大學において、特にヘツケル・フォルトラグ及びオットー・フライデラーの下に學んだ、オイケンの講義なども聴いた。大凡そ三年の後イエナを去つてハイデルベルヒへ行つた、それはクーノーフィツシャーの下で大學に於ける學習を了る爲であつた。千八百八十一年に先生は、シヨペンハウアに關す

によつて學立

二二・七・二四譯書了、刷

されたのはその

（人間の自由

に關するシエリングの説を論じたる）に過ぎない。

つてゐる略ぼ十年をミュンヘンで過ごした後、千

その「シヨペンハウアーの解脱論」とシユウエーグラ
 ーの哲學史教科書第十一版のために書いた（シヨ
 ペンハウアーに關する）一章とによつて先生はエ
 ドワルドフォン・ハルトマンと交通するやうになつ
 た。彼に促されて先生は「エドワルド・フォン・ハル
 トマンの哲學體系」（一八八四年）を著はした。次い
 でカールスルーから教師に招聘せられて、之に應
 じた。同地の創立されたばかりの音樂學校で先生
 はピアノと和聲學の教授を受持ち、また音樂史や
 音樂美學を講じた。一年の後にはしかし先生はカ
 ールスルーを去つてミュンヘンに移つた。このミ
 ュンヘンはドイツのあらゆる大都市の中でその
 常に最も好んで居られたものである。此處では大
 抵著作に従事し、シヨペンハウアーに關する著書（
 シヨペンハウアーの哲學）「復習用哲學史」其他を公

つてゐる略ぼ十年をミュンヘンで過ごした後、千
 八百九十三年に先生はハルトマンの推薦によつて
 東京帝國大學における哲學の教授として日本に招
 聘されたのであつた。二十有一年の間一度も中絶
 することなく先生は文字通りにその學生のために
 生きつゝ、脱俗的哲人の生ける像として又わが大
 學の特別の誇として、その最上の壯年時代を我々
 の間で過ごされたのである。先生は單に詞を以て
 した許りでなく、同時にまた自ら模範となつて、
 行爲を以て、否更に進んでは單にその此地に居る
 ことによつて教へ且つ影響を與へた。先生を見て
 我々は、哲人の何たるやを、且つ更に重天なるは
 人間の何たるやを學んだのである。先生はその學
 生を愛好した、そしてこれ應て先生がかく長い歳
 月を我國で過ごした所以を説明するものである。
 大學教師としては先生は常に就中ドイツの文化、

ドイツの學術及び文學に對する感覺(理解)を學生の間に喚起することに努められた。わが大學にギリシヤ語の研究を導入したのも實は先生であつた。

先生はその講義を單に哲學の領域にのみ限らなかつた——一般詩學、基督教の歴史及び哲學、ゲーテのファウスト、其他の如き題目についても亦好んで講せられた。其外特に數人の學生と共にギリシヤ及びローマの古典を講讀するのを例としてゐた。多年ピアノの教師をしてゐた音樂學校(上野の)においても亦先生は常にドイツ音樂を重んじた。

今より八年前、東京における教職の任期が充ち方にドイツに歸らんとせられた時、世界戦争が勃發した、そこで先生はその出發を延ばし、横濱で戦争の終熄と彼地の平穩に歸する時を待たうと決心されたのであつた。八年以來先生は全く世間から隱退して横濱なるその友人露國總領事アレクサン

ル・ウオルム氏の官邸の一小室に住み、多くは文上の仕事に従事してゐた。四年前には岩波書店から「小品集」を、また昨年は「續小品集」を公にした。なほ此頃も雜誌「思想」のために文學に關する論文を續けて執筆して居られる。蓋し先生には、力及ぶ限り、如何やうにか、日本の青年のために盡したいとの希望が有つて去らないからである。其他の點については、先生は健康の勝れないことは多いけれども、精神的には猶ほ頗る清新で、靜かに神に信頼しつゝ生き、落著いて來るべきことを待つて居られる。(Deutsche Blätter, 16. Mai 1922)